子供のための焚火のある生活

前田　朋英　*Written by Tomohide Maeda*

焚火でコミュニケーションをする

私はNPOのスタッフとして里山の保全・再生活動に関わっている。里山に関する活動は全国的に非常に盛んに行われており、環境省の調査によると、日本各地で約一〇〇〇もの団体が活動をしているという。これらの活動の主な内容は、管理されなくなった雑木林の下草刈りや木の伐採を行ったり、放棄された田んぼや畑などを耕したりするとともに、かつて日本の農村にあった文化や風習、さまざまな知恵などを掘り起こし保存継承していくことである。こういった活動で欠かせないのが皆で囲む焚火である。

特に焚火に夢中になるのは、子供ではなくおじさん連中だ。実際の里山保全に関わる作業よりも、作業後に囲む焚火を楽しみにしている人の方が多いのではないかと思うぐらい皆焚火が好きである。彼らになぜ焚火がそんなに好きかと尋ねると、子供の頃の体験を語る人が非常に多い。

日本でもある時期までは、あちらこちらで火が燃やされ、まるで焚火天国という状況だったようである。焚火にはどこからともなく人が集まり、火を囲んだコミュニケーションの場となっていた。そこにはもちろん子供の姿もあり、火を自在に操る大人の姿はとてもカッコよく見えたという。そんな子供にも役割はあり、焚き付けのための小枝や葉っぱ、燃やしてしまう木端などを集めてくるのが仕事であり、焚火は大人と子供が一緒にできる作業であった。

焚火は誰でもが参加できる協働作業であり、作業を通じてコミュニケーションを図ることができる場だったのである。

子供と一緒にする焚火

焚火は創造的な遊びである

私が関わる活動で、子供たちと一緒に作業を行う現場では、なるべく焚火を囲むようにしている。

おじさん連中ほどではないが、子供たちも焚火（というよりも火遊び）は好きである。火に慣れない子供こそ、最初は遠巻きに見ていたり、立ち上る煙に顔をしかめていたりしているが、すぐに何かを燃やしたい衝動に駆られるようである。少しずつ周

りにあるモノを焚火の中に放り込んでは、それがどのように燃えるか観察し、また違うモノを放り込む。それを繰り返しているうちに、ある時点から焚火のツボにはまっていく。

火遊びに熱中する子供たちを見ているとなかなか面白い。焚火は燃やすモノの大きさ、材質、木の種類、乾燥の具合などにより見せる炎はすべて異なり、その反応もダイレクトである。スギの葉や枯れ草などに火をつけるとパチパチと勢いよく燃え上がり、生木をくべるとシューシューと樹液を出しながら燃えていく。竹は油を含むので燃やすと一気に炎が大きくなり「バン!」と節が破裂する。もちろん小さな薪よりは、大きい方が、火もちがいい。

火が見せるさまざまな反応は、子供たちの想像力を掻き立てる。これを燃やせばどうなるんだろう、これはすごく燃えるはずだ。焚火が見せる意外な反応に驚嘆しながら焚火遊びに没頭していく。水をかけたり、さまざまなモノを燃やしたりしながら、やがて彼らなりの遊びを創りだす。「水をかけると火が消える、紙を焚火に入れるとすぐ燃えてしまう、では、紙コップに水を入れるとどうなるんだろう…」と思ったのか、水を入れた紙コップをそっと焚火に入れても燃えないことを発見し驚いている子供を見た時は、焚火の意外な効果に気付かされた。焚火で自由に遊ばせると、子供たちはどんどんと新しい発見をし、さまざまな現象の新しい組み合わせを創造していく。

焚火は創造的な遊びである。ただし、次第にエスカレートしていくので注意が必要だ。

見直される人と地域の関係

話が突然飛ぶようだが、私たちの生活を持続可能にするためには、自分が住んでいる地域を実感する必要がある。

今日の環境問題は、私たちと生活を支えてくれている地域との関係が切れてしまっていることに原因の一端がある。今の暮らしで使っているモノが、どのような過程をたどって生産され私たちの手に届くのか、知らないモノがほとんどであり、また知ることもできない構造が今日の社会にはある。

世界各地から調達される資源に依存する暮らしの中で、私たちは自分が住む地域の自然と関係を持たなくなると、地域への親しみは薄れ、その土地に関する知識も乏しくなり、そして関心を持たなくなる。自分たちの生活と関係のないものはどうでもよい存在となり、土地は地域とのつながりを持たないものとして放棄されていく。いたるところで荒廃している森林や里山、切り売りされていく緑地などがいい例である。

そんな中、自分の地域を再評価し、人と地域との関係をつなぎ直していこうという動きがあちらこちらで始動している。熊本県水俣市と宮城県仙台市で生まれた、地元で「あるもの探し」をし、発見したものを再評価することで地元に役立てようという「地元学」や、自分が住む地域のことをよく理解し密接に関わることで、土地と自然の間に持続的な関係を回復しようという「地域生命主義（バイオリージョナリズム）」という運動などもその一つである。

井上有一氏は「人の関係―地域の土地と人間のつながり」の中で、持続可能な社会を築くためには「現在の収奪的な関係とは全く異なる共生的な関係を人間と土地との間に確立することが必要で、さらにそのためには、人間が大きすぎることのない地域に戻り、そこの土地（自然）との間に責任と感情を伴う特殊な関係を築いていくことが必要である」と書いている。

特別な関係を持った場所からやってくるモノには、特別な感情が伴う。例えば自分がボランティアで間伐作業をした森から切り出された木

竹の間伐の様子

材や、知り合いの農家が作った野菜、いつもキャンプで焚火をしている川で獲れた魚など、どれも思わず大切にしてしまう。

人間の生活を環境の面から考えて持続可能にしていくためには、住んでいる地域のことをよく理解し、自分の暮らしがなるべくその地域内で支えられるように見直していく必要がある。そのためには、自分と特別な関係を持った場所を地域の中に増やしていき、住んでいる地域を実感していくことが重要である。特にこれからの世代を担う子供たちと地域との関係をいかに結んでいくかがこれからの課題である。

焚火をとおして関係を持つ

場所と特別な関係を築くための手段として焚火を勧めたい。

私が今まで焚火をしてきた場所は、その他に比べて、とても印象に残っているし愛着がある。

手入れがされた雑木林

特に子供の頃の記憶は鮮明である。私が生まれ育ったのは滋賀県のある町で、すぐ近くに野洲川という大きな川が流れていた。子供時代の暮らしは川とともにあり、そこで泳ぎ、魚を採り、化石を掘り、時にはキャンプをして遊んでいた。遊びの中で焚火は付き物であり「ここは自分の場所だ」という感覚を、子供の頃にした焚火を通して抱いたように思う。

焚火をするということは、その場所に少なくとも数時間、長い時には数日間とどまることを意味する。焚火をし、火を見ながらじっくりと時間をかけてその場所と深く関わり合う時、そこには仲間との、そして場所とのコミュニケーションがあり、とても印象の深い体験となる。焚火はある場所と特別な関係を持つ手段として有効であり、多くの場所で焚火をすることで、自分が住んでいる地域に愛着を持つことができるのである。

子供時代に自分の地域だという感覚を持つことは非常に重要である。子供の頃に慣れ親しんだ川や森、田んぼなどの自然環境に対する感情には特別なものがある。イディス・コッブ氏の『イマジネーションの生態学』によると、子供の頃に遊ぶことによって培われた特定の地域の自然との関わりあいの中に、大人になってからの世界観やものの見方、考えるための枠組みを構築していくのがあるそうだ。つまり特定の場所との関わりの中に、自分自身の原点があるということである。

今の子供たちにとって、山や川などの自然は身近な遊び場ではなくなってきている。比較的自然が残った地域であっても、そこに入り浸って遊ぶということが少ないそうである。それは上級生から下級生へ遊び場や遊び方の伝承が途絶えたということに加え、かつては適度に管理されていて心地よい空間だった里山の手入れがされなくなり、簡単に入ることができなくなっているのも一つの原因だ。

子供と一緒に自然の中で遊ぶことの一つとして、焚火を大切にしたい。気軽に焚火をすることができない時代だが、だからこそ意識して焚火のできる環境を作っていく必要があり、焚火をする場所を守るということも里山保全の大きな意味であると考えている。

CEL

参考文献

●「人の関係―地域の土地と人間のつながり」井上有一（『自然への共鳴 第二巻』思索社　黒坂三和子編　一九八九）

●『イマジネーションの生態学』思索社　イディス・コッブ　一九八六

◎前田　朋英（まえだ・ともひで）

特定非営利活動法人よこはま里山研究所（NORA）研究員。よこはま里山研究所では、市民と行政のパートナーシップによる里山の復元、自然再生事業、人と自然の関わりの再構築、環境教育などに携わる。また、神奈川森林エネルギー工房運営スタッフとして木質バイオマスエネルギーの普及啓発に関わり、有志と結成した焚火の会では、月に一度、焚き火を楽しんでいる。